

# 都市住民の山村移住による備長炭の技術伝承

—— 和歌山県中部山村の事例 ——

篠原重則

## I 緒言

現在、日本の農山漁村は人口減少と人口の高齢化に悩まされ、過疎問題が深刻である。しかしながら、一方では都市住民の農山漁村への関心も高まっているといえる。2004年度の農林業白書によると、消費者の多くは国産農産物の安全性や品質を評価しており、輸入品より割高でも買いたいという声が多いと指摘している。国産品への消費者の関心をさらに高めるような販売戦略を展開することが、今後の農業の活性化に必要だとしている<sup>1)</sup>

筆者の学究生活は、1962年勤務校下に見られた焼子制度という前近代的な製炭形態の実地調査<sup>2)</sup>に始まる。焼子制度とは、親方である炭問屋に隷属した貧しい製炭者が炭問屋に払下げられた広大な国有林に入山し、木炭を賃焼きする製炭形態である。製炭作業はほぼ一年を通して営まれるが、その間の生活に要する食料や日用雑貨品は、親方から現物で前借りする。その前借品代は盆と節気に<sup>せきぶ</sup>焼分（焼き賃）で清算されるが、なかには前借品代の方が多く、次回も親方に払下げられた国有林に入山し、山から山へと移動しながら製炭稼業に明け暮れる者<sup>3)</sup>もいた。

四国西南地域の製炭業は、技術的には四国東南地域の山村から伝播してきたことを確認したので、四国東南地域の製炭業の調査に赴く。そこに展開している備長炭の製法は大正元年和歌山県より伝播してきたことが判明したので、1965年の初頭には、和歌山県田辺市の秋津川地区の調査に赴いた。秋津

川地区の備長炭の製法技術は、きわめて卓越したものであったが、そこには薪炭商に従属した焼子制度の遺制<sup>4)</sup>もみられた。

筆者の研究は2000年ころから、農林水産物の直売と農山漁村の活性化の研究<sup>5)~9)</sup>に移行するが、2003・2004年に和歌山県田辺市の秋津川と、そこに隣接する南部川村に、梅栽培・販売と山村の活性化の調査に赴くと、そこに都市からの移住者が、備長炭の生産に励んでいる姿を多く目撃し、伝統的な備長炭の生産が移住してきた製炭者によって継続されていることに、いたく学問的興味を覚えた。

伝統的工芸品の生産などにおいては、徒弟制度によって、その技術が新規参入者に伝えられることは、多くの研究がみられるが<sup>10),11)</sup>農山村においては、そのような事例研究は寡聞にして、あまり聞くことはない。本論文を草した目的は、いまだ事例研究の乏しい農山村における伝統的生産技術が、都市からの移住民によって、どのように伝承されているかの解明にある。

## Ⅱ 山村定住に関する和歌山県の施策

和歌山県は都市住民の農山村定住に意欲的に取り組んでいる代表的な県である。農林水産部内には定住促進課があり、就業相談・生活体験研修<sup>2)</sup>定住の為の農林業複合経営支援<sup>13)</sup>地域特産品の情報提供などの業務を行っている。

和歌山県定住促進課では、和歌山県 UJI ターンマニュアルという小冊子を発行しているが、表1は、この小冊子から、都市住民の移住民による備長炭の技術伝承の盛んな4市町村について、その独自の定住対策を示したものである。これによると南部川村や田辺市など、原木のウバメガシ林の多い紀州備長炭の核心的生産地に比して、その周辺の中津村や大塔村に、都市住民の導入策が積極的なのは、注目されるところである。

表1 和歌山県内独自の定住対策一覧

| 市町村名 | 支援項目         | 支援内容   |
|------|--------------|--|
| 中津村  | 出産に関する支援制度   | 1子……………3万円<br>2子……………3万円<br>3子以降……10万円   |
|      | 産業振興に関する支援制度 | 紀州備長炭窯補助……………10～30万円<br>紀州備長炭製炭技術の伝承……製炭研修所の建築<br>研修期間：原則1年<br>遊休農地の賃貸制度……………面積1,000㎡まで<br>賃貸料（年間11,800円/千㎡）<br>森林組作業班員等への賃金助成……助成期間：採用後3年<br>補助率：3/10以内 |
| 南部川村 | 出産に関する支援制度   | 3子……………30万円<br>4子以降……80万円  |
| 田辺市  | 就業就学に関する支援制度 | 紀州備長炭後継者育成事業費補助金<br>…紀州備長炭新規就業者に対して、田辺市木炭生産組合員の方々に製炭技術の指導をしてもらい指導料を補助する。<br>年間30万円   |
| 大塔村  | 結婚に関する支援制度   | 若年結婚祝い金(16～40歳未満)……結婚祝い金10万円<br>縁結び謝金5万円   |
|      | 出産に関する支援制度   | 3子……20万円<br>4子……30万円<br>5子……50万円   |
|      | 転入に関する支援制度   | 若者定住奨励金（新卒者）……………20万円<br>若者転入奨励金（単身者）……20万円（家族）……25万円  |
|      | 就業就学に関する支援制度 | 新規農業従事者……年間60日以上従事し、10a以上耕作、または林業に年間60日以上従事したもの…<br>20万円   |
|      | 住宅に関する支援制度   | 若者住宅対策奨励金（16～40歳未満）<br>建築・購入（70㎡以上）……一般80万円、辺地100万円<br>増築（50㎡以上）……………一般40万円、辺地50万円<br>空屋改築……………一般40万円、辺地50万円   |

注) 和歌山県農林水産部定住促進課（2003）：「和歌山 UJI ターンマニュアル」より作成

### Ⅲ 和歌山県の製炭地域

全国一の高級木炭である紀州備長炭の生産地域として知られている和歌山県は、木炭全体の生産量では全国の8.1%を占め、全国第3位の生産量を誇る。

表2 全国上位10県の木炭生産量(2003年)

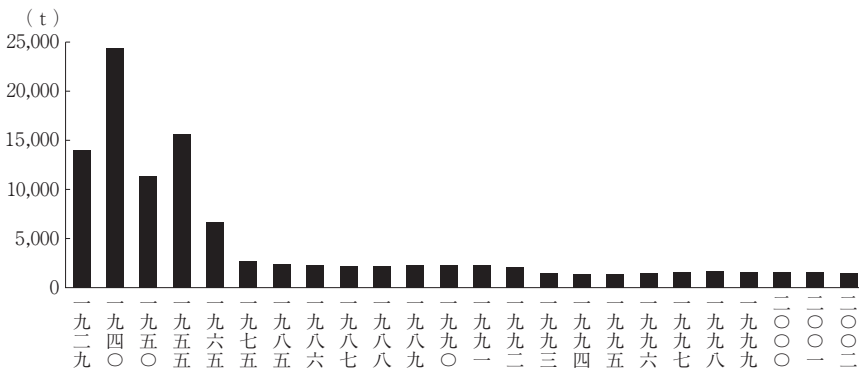
| 県名    | 木炭生産量 t | 全国比   | 白炭 t          | 黒炭 t           |
|-------|---------|-------|---------------|----------------|
| 1 岩手  | 5,070   | 23.8% | 43 ( 0.8)     | 5,027 ( 99.2)  |
| 2 北海道 | 3,592   | 16.8  | 3 ( 0.1)      | 3,589 ( 99.9)  |
| 3 和歌山 | 1,735   | 8.1   | 1,675 (96.5)  | 60 ( 3.5)      |
| 4 山梨  | 1,267   | 5.9   | 5 ( 0.4)      | 1,262 ( 99.6)  |
| 5 福島  | 991     | 4.2   | 50 ( 5.5)     | 861 ( 94.6)    |
| 6 高知  | 831     | 3.9   | 520 (62.5)    | 311 ( 37.4)    |
| 7 熊本  | 684     | 3.2   |               | 684 (100.0)    |
| 8 栃木  | 589     | 2.7   | 33 ( 5.6)     | 556 ( 94.4)    |
| 9 宮崎  | 579     | 2.7   | 473 (81.6)    | 106 ( 18.3)    |
| 10 群馬 | 418     | 1.9   | 7 ( 1.6)      | 411 ( 98.3)    |
| 全国    | 21,300  |       | 3,782 (17.7%) | 17,519 (82.3%) |

(注) 林野庁, 特用林産対策室資料による。  
白炭・黒炭の( )内はその生産比率を示す。

全国1・2位の岩手県・北海道は黒炭生産地域であるのに対して, 和歌山・高知・宮崎の諸県は白炭の生産地域であり, 特に和歌山県は全国の白炭の44.2%の生産を占め, 高級な備長炭の産地としての名声を博している。

木炭はその製法から窯内消火で生産する黒炭と窯外消火で生産する白炭に分類されているが, 紀州備長炭は白炭の代表である。図1は和歌山県の白炭の生産量の推移を示すが, これによると, 木炭生産の最盛期であった1940年には

図1 和歌山県の白炭生産量の推移(1925~2002年)



(注) 和歌山県特殊林産物需給動態調査による

24,184 t の生産を誇っていたが、1960 年ころからの燃料革命のあおりを受け、1975 年には 2,740 t と最盛期の 8.3% に低下し、以後 2,500 t 以下で推移し、2002 年には 1,632 t となっている。

図2 和歌山県の市町村別木炭の生産量 (1960 年)

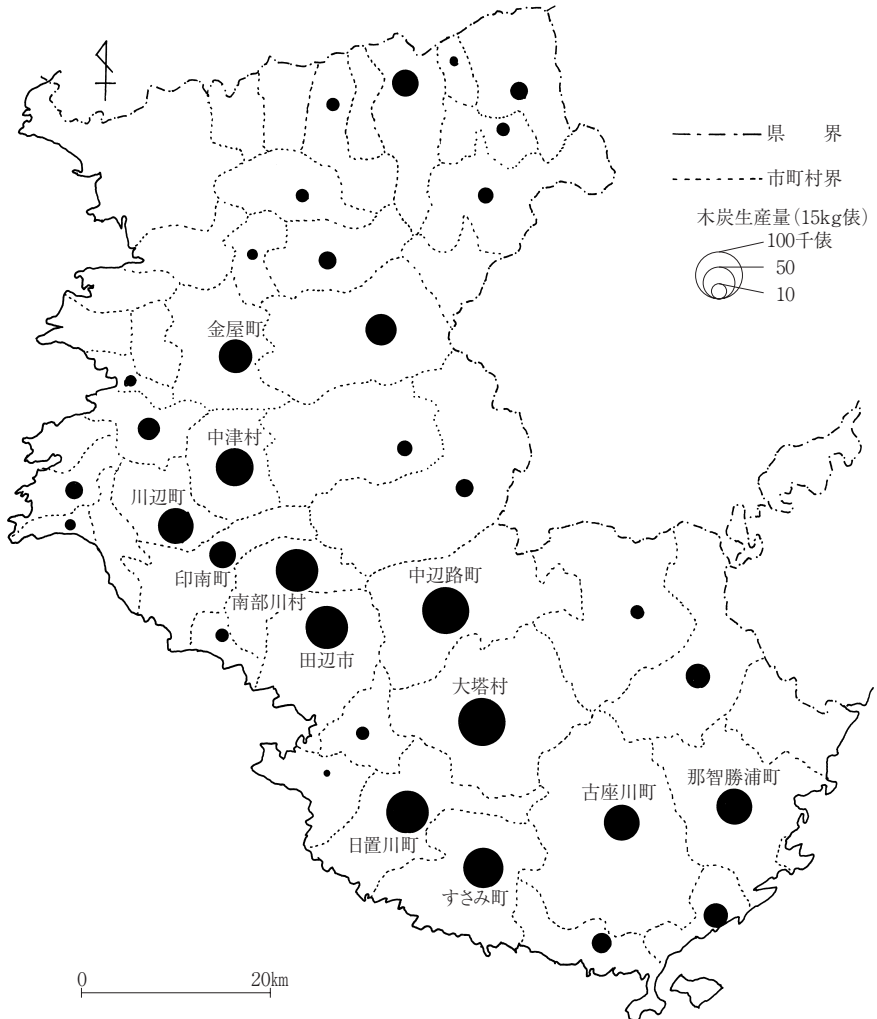
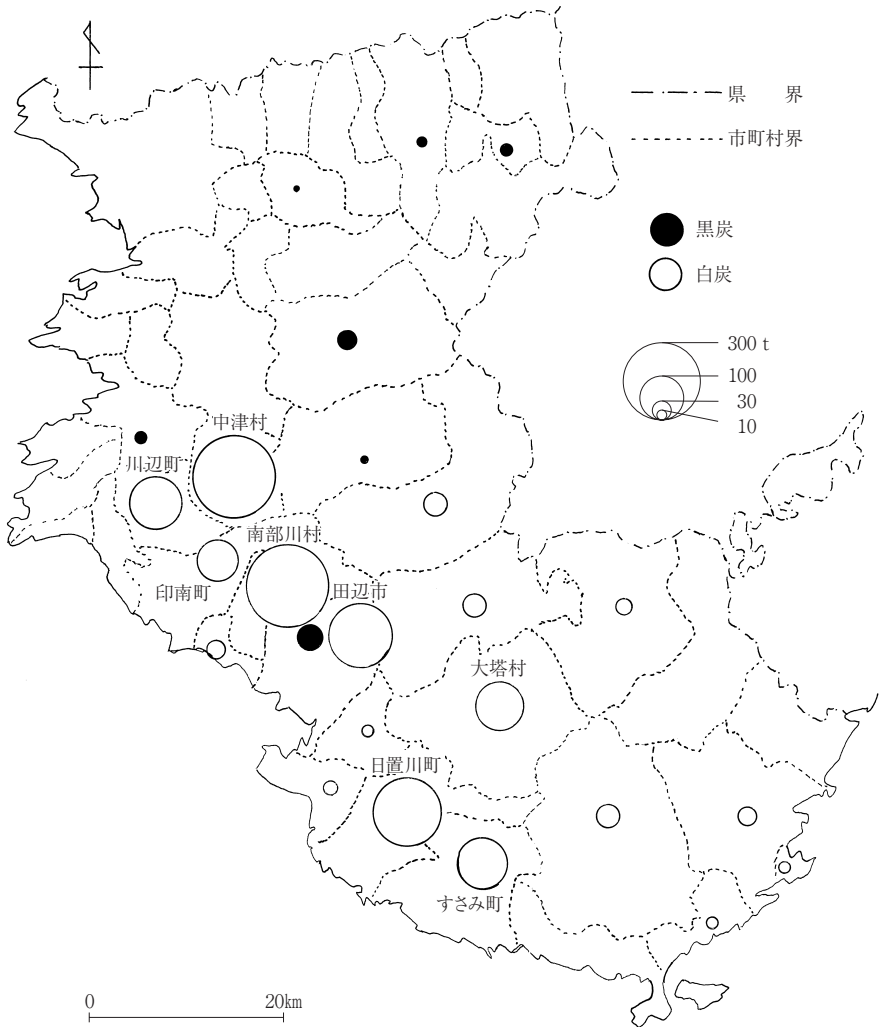


図3 和歌山県の市町村別木炭生産量(2003年)



注) 和歌山県特殊林産物需給動態調査より作成

図2は燃料革命以前の1960年の和歌山県の市町村別の木炭生産量の分布を示すが、これによると和歌山県の製炭地域は、和歌山県中・南部の山村に広く展開していたことがわかる。図3は2003年現在の和歌山県の市町村別の木炭生産量を示すが、原料のウバメガシ林の卓越する南部川村・田辺市を中心に、北は中津村から、南は大塔村・すさみ町に至る和歌山県中部山村に集中していることがわかる。

## IV 紀州備長炭の製炭方法

### (ア) 紀州備長炭の特性

備長炭は、主としてウバメガシを炭材とする白炭で、ウナギのかば焼き、ピフテキ等の魚肉の直接加熱、焼きもの料理には最適の燃料で、その加熱効果については多くの実験例がある。その放射エネルギーを測定したところ2～6ミクロンの波長の放射線が多い。この放射線は肉類に吸収され、その表面温度が上昇し易く、硬化して内部のうまみ成分を外に出しにくいという。肉の内部のタンパク質は熱分解して、うまみ成分、アミノ酸が生成されるという<sup>14)</sup>

### (イ) 紀州備長炭の製法

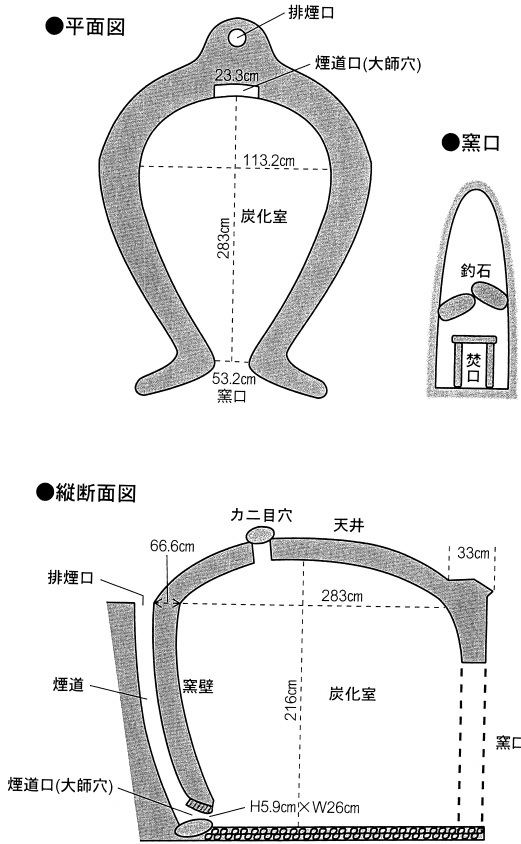
#### 〔築窯〕

備長炭の生産は、まず築窯にはじまる。図4は備長窯の構造を示す。その平面はいちじく型であり、窯口から煙道口までは2m80cmくらい、縦断面図をみると炭化室の高さは2m余であり、約1t前後(15kg俵にて60俵程度)の出炭量の



写真1 南部川村嶋之瀬における備長炭窯の構築  
(2004年3月)  
瓦と粘土で構築、備長炭新規参入者(55歳)の窯

図4 紀州備長炭の構造



注) 田辺市経済部農林課 (1999) 「紀州備長炭の世界」 p. 10 より転載

炭窯が一般的である。炭窯は各製炭者の経験をもとに作られるが、1,000度以上の高温に達する精錬に耐えなければならず、石やレンガの内壁を粘土で覆って作られる。窯の耐久期間は短く、天井部分は3～4年、窯全体は長くて14、15年くらいで築き直さなければならない。窯の再構築は、元の窯の土を細かく砕いて新しい土と混ぜて使うと耐久性が向上するという。



## 〔原木の伐採と木づくり〕

備長炭の原料は主として、ウバメガシであり、図5に示すように、和歌山県中南部には広く分布する。ウバメガシの特徴は硬くて重く、水に浮かべても沈下するという、和歌山県のウバメガシは、臨海部・内陸部に広く分布し、天然林と人工植栽されたものがある。備長炭の核心的生産地である田辺市秋津川や

図5 和歌山県のウバメガシ林 (1996年)



注) 後藤伸 (1996) : ウバメガシ林調査による。  
 (紀州備長炭熊野会議実行委員会 : 「紀州備長炭の世界」)

南部川村では、図9に示すように択伐林仕立てで、8～10年ごとに伐採され、25年程度で3回択伐されていたという、極めて集約的な萌芽更新がなされてきた。ウバメガシ林は何窯分焼きの山として原木が売買されてきたが、製炭者は山主から択木管理することが義務づけられていた。

製炭者は窯場に原木を運ぶサデ道を作り、傾斜にしたがってサデ道に原木を投げ入れ、自然落下させたり、木馬で運搬したり、ワイヤーロープを張って架線で窯場に運搬した。窯場に運ばれた原木は乾燥しないうちに木づくりが行われる。木づくりとは、曲がりくねったウバメガシの原木に鋸で切れ目を入れて、コミと呼ばれる木片で作ったクサビを差し込んで真っ直ぐにする作業のほかに、直径7～8cmにも達する木は



写真2 南部川村西之庄におけるウバメガシの伐採、木馬に積み込み(2004年11月)

石井玄三様(55歳)夫妻-藤枝市出身の新規参入者-の作業



写真3 南部川村西本庄における択伐林(2004年11月)  
択伐直後の薪炭林



写真4 中津村三十井川における木づくり作業  
(2003年11月)

2つに割ったり、4つに割ったりすることである。原木の伐採と木づくりは、窯入れが終わって口焚き乾燥の期間や、炭化の期間を利用して行われる。

### 〔窯詰め（立て込み）〕

ウバメガシの原木は数本をたばねて窯詰めされるが、それは窯出し直後、炭窯に余熱が残っている間に行われる。それは窯内で原木の乾燥が進み、より品質佳良の備長炭が仕上がるためである。窯入れ作業にはコロバシと立て又が使われる。コロバシは中央のへこんだ丸太であるが、その上に束ねたウバメガシの原木を載せて、窯内に運び、立て又にて、順次窯内に奥から立てかけていくのである<sup>15)</sup>

### 〔口焚き〕

原木の窯詰めを終えると、窯口の上部半分を煉り土と石で塞ぎ、下部に雑木をくべて着火する。ここで勢いよく火を立ち登らせる。火力が弱いと逆に炭材に火が着いてしまい失敗するという。口焚きをはじめから3日程度で真っ白な煙のようなものが勢いよく出はじめ、甘酸っぱい香りが鼻をつく。原木に含まれた水が水蒸気となって排煙口から吹き出してくるのである。窯の中の原木の乾燥が十分に行き届いたかどうかは、この煙の色と匂いで判断する。乾燥が終わりに近づくと、白い煙が青みがかってくる。さらに白い煙が間をおいて出てくると原木が蒸し焼きに移り炭火が始まるのである。

### 〔炭化と木酢液の採取〕

炭化状態となると、メアナと呼ばれる直径4～5cmの穴を数個残して、それ以外の窯口はすべて土と石で塞ぐ。炭化段階においても、見えない窯の中の状態を判断するのは、ベテランの製炭者でも煙の色と匂いのみである。窯口のメアナを開閉することで、炭化の状態を最高に保つ。炭化段階に入って3、4日たつと、煙は透き通った青色に変色していき、炭化終了のシグナルとなる。木酢液は炭化段階で採集する。木酢液には、森林総合研究所生物活性物質研究室の分析結果によると、現在、242種類の化学成分が確認されており、土壌改良・農薬・防腐剤・消臭剤などの用途に利用されている。

### 〔精錬（ねらし）〕

炭化が最終段階に近づくと、精錬（ねらし）に入る。備長炭をはじめ白炭の最大の特徴は精錬である。炭化を終えると窯口を徐々に広げ窯の中に空気を送り込む。窯口を広げていくと、窯内の空気の量が増え、一気に炎が上がり、木炭は真っ赤に燃えはじめ、精錬の最終段階では、窯口の下半分を全開すると、赤い炎が窯口から吹き出してくる。木炭の炭化度は98%を超え、ダイヤモンドの硬さに達する。

### 〔窯出し・消火〕

精錬の終わった木炭は、エブリと呼ばれる道具で窯外にかき出され、灰と土を混ぜた素灰すばいをかけて消火する。炭は一度にはかき出さず、エブリで半日もかけて徐々に行われる。奥の方の木炭は空気が送り込まれ、ねらしは順次進行していく。



写真5 中津村製炭研修所における窯出し作業  
(2004年11月)

### 〔選別・箱詰め〕

窯出しされた木炭はまる一日かけてさまされ、素灰の中から掘り出される。炭の長さは20cm以上に決められており、木の株か鉄でつくられた炭切台にのせ、鉦なたで断ち切り、選別して箱に詰めていく。備長炭の硬度は17度前後で鉄より硬いため、ノコギリでは切れない。硬度は備長炭の品質を表す尺度でもある<sup>6)</sup>箱詰めは品質別に行われるが、ウバメガシの銘柄で、馬目中丸（太さ4～6cm）、馬目上小丸（太さ3～4cm）、馬目小丸（太さ2～3cm）、馬目半丸（長辺3～6cm）、馬目割（長辺3～6cm）、カシの銘柄で、備長小丸（太さ2～4cm）、備長細丸（太さ1.5～2cm）、備長半丸（長辺3～6cm）と細分さ

れている。なおウバメガシ・カシの全銘柄共、長さは20cm以上である。

以上備長炭の全工程を終えるには、14日から18日程度を要する。カンと経験によって全工程を遂行するわけであるが、都市住民はベテランの製炭士<sup>17)</sup>に指導を請いながら、数年間で修得するのである。

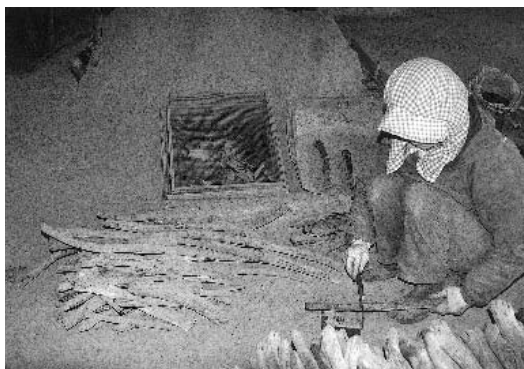


写真6 南部川村清川における木炭の選別作業  
(2004年1月)  
夫55歳藤枝市出身、元家具店勤務、妻は元看護婦

表3 備長炭の製炭工程

| 工 程       | 所要時間       |
|-----------|------------|
| ① 窯入れ     | 8時間        |
| ② 口焚き・乾燥  | 約1週間～10日前後 |
| ③ 炭化      | 3～4日       |
| ④ 精練(ねらし) | 12時間       |
| ⑤ 窯出し     | 12時間       |
| ⑥ 選別      | 8時間        |

注) 田辺市経済部農林課(1999)「紀州備長炭の世界」を参照して作成

## V 紀州備長炭の生産の現況

### (ア) 製炭者の減少

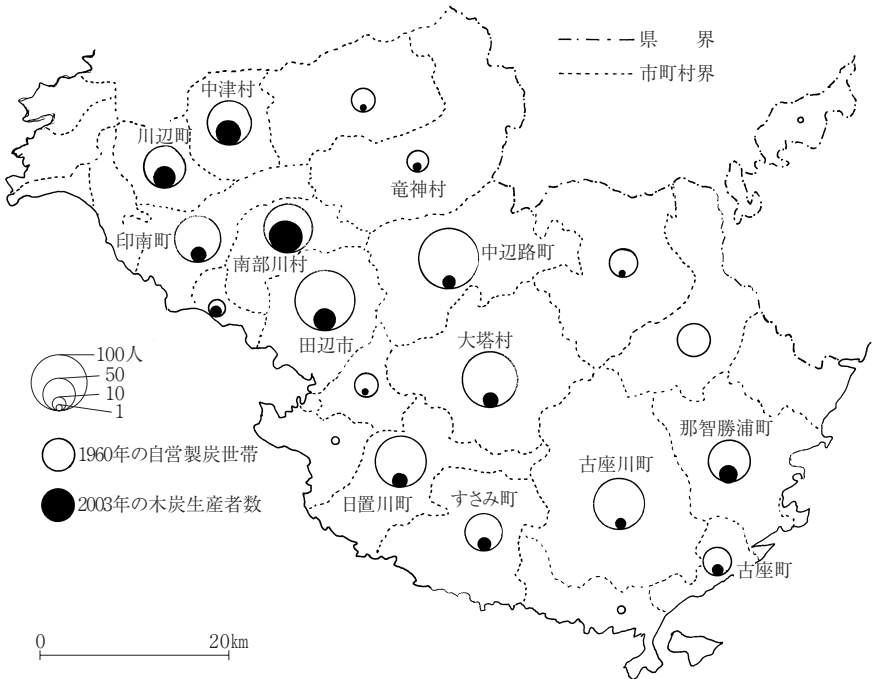
紀州備長炭の生産は1940年(昭和15)には24,184tであったが、2002年には1,632tとなり、最盛期の6.7%に減少した。これは1960年ころに始まる燃料革命による木炭の消費量の減少によるものであるが、生産量の減少は、木炭生産にたずさわる製炭者の激減をもたらした。和歌山県の製炭世帯は、1960年の世界農林業センサスによると2,085世帯であるが、2003年の和歌山県特

用林産物需給動態調査によると、製炭者数は197人に減少している。

図6は、紀州備長炭の生産の多い和歌山県の中・南部の市町村別の最近40年間の製炭者の減少状況を示しているものである。

製炭者数の最も多い南部川村に例をとると、1960年には111の自営製炭世帯を数えたが、1999年には48世帯となっており、2004年には25世帯と半減している。1999年から2004年の間に、製炭業から脱落した世帯をみると、製炭者が高齢化したもの10世帯、同死亡したもの4世帯、同病気となったもの

図6 和歌山県の製炭者の市町村別の減少状況(1960~2003年)



注) 1960年の製炭者数は1960年農林業センサスの市町村別統計書(和歌山県)の自営製炭世帯。2003年の製炭者数は和歌山県の特種林産物需給動態調査の木炭生産者数による。

1世帯、同梅栽培に転向<sup>18)</sup>したもの6世帯、製炭者が出身地に帰郷したもの1世帯、不明が1世帯となっている。隣接の田辺市秋津川地区も同様の傾向である。

### (イ) 都市住民の山村移住

それでは、このような製炭者の減少はどのように補充されているのであろうか。すでに第2章でも述べたように、和歌山の農林水産行政の一環としての農山村への都市住民の定住政策と、各市町村で行っている製炭業に新規参入する者に対する技術指導、あるいは定住政策が、各市町村で行われていることが、製炭業への新規参入を招来し、製炭業の担い手の養成となっているのである。

和歌山県の紀州備長炭参入者の資料によると、1989年(平成元)から2004年の紀州備長炭新規参入者は87名に達し、都市域から農山村へのUターン者が46%、都市域からの和歌山県の都市域へのJターンが6.9%、都市域から身寄りのない農山村のIターンが41.4%となっている。

市町村別の紀州備長炭への新規参入者数は表4に示すが、これによると、南部川村の16人をはじめ、中津村・田辺市・大塔村などに紀州備長炭への新規参入者の多いことがわかる。一方、紀州備長炭への新規参入者を送り出す地域をみると、和歌山県(46人)以外では隣接する京阪神区が最も多く、次いで首都圏、福岡県などが多いといえる。

表4 紀州備長炭の市町村別新規参入者数

| 市町村名  | 新規参入者数 |
|-------|--------|
| 南部川村  | 16     |
| 中津村   | 13     |
| 田辺市   | 12     |
| 大塔村   | 11     |
| 日置川町  | 8      |
| 川辺町   | 7      |
| 南部町   | 6      |
| 中辺路町  | 4      |
| 那智勝浦町 | 3      |
| 白浜町   | 2      |
| 印南町   | 2      |
| すさみ町  | 2      |
| 龍神町   | 2      |
| その他町村 | 11     |
| 合計    | 99     |

注) 和歌山県定住促進課資料による。転入者数は平成元年～14年の分。うち12名は廃業等で製炭を中止した。

図7 紀州備長炭新規参入者の出身地（1989～2003年）



注) 和歌山県農林水産物定住促進課提供資料より作成



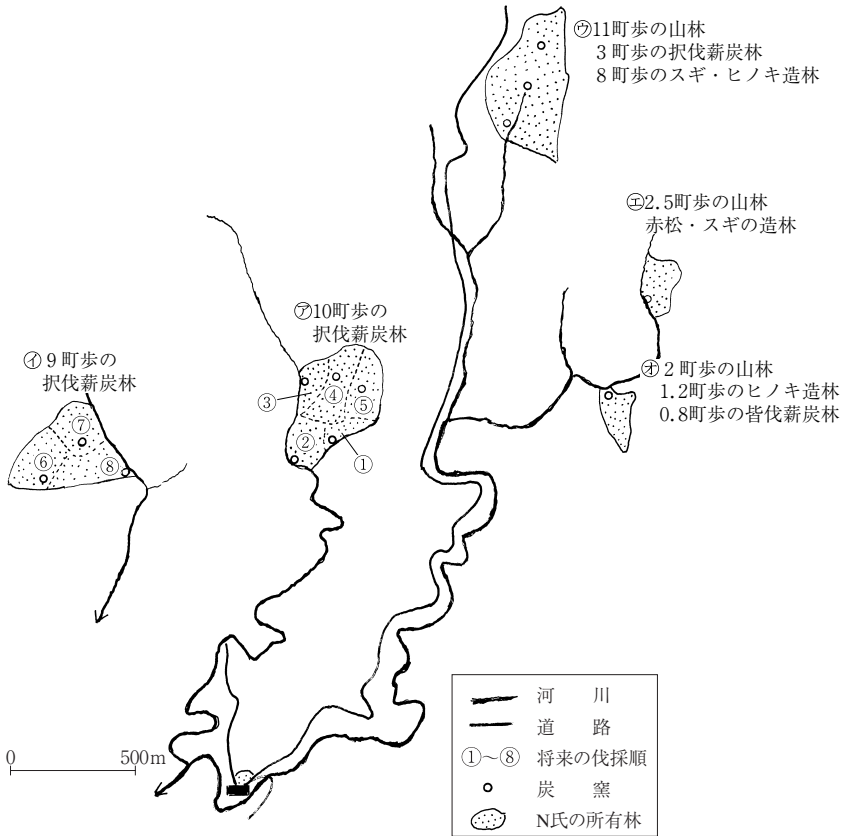
### (ウ) 従来の製炭形態

紀州備長炭の製造は、従来どのように行われていたのであろうか。図8は、約35町歩の山林を所有し、主として㊦10町歩・㊧9町歩の択伐林にて原木を調達している秋津川地区のN氏の自山の択伐林経営を示すものである。択伐林には弱度・中庸・強度択伐の3様式があったが、図9はそのなかで中庸度の択伐林を示す。中庸度択伐林は、林積で60～70%、本数で20～30%、目通り直径4.5cm以上の樹木が択伐の対象となる。回帰年は8～10年、林層は三段林をなす。択伐林は幼齢木・中齢木を伐採せず、伐採周期が短いので、皆伐林に比較して、同一年間に50～60%の増収穫を得ることができた。当時、紀州備長炭の核心的生産地であった秋津川地区のウバメガシの択伐の技術は、全国の最高水準<sup>19)</sup>にあったといえる。

しかしながら和歌山県中部の山村は、大山林地主による林野の集積が激しく、日本の代表的大山林地主の出現地<sup>20)</sup>であった。明治以降は臨海部の薪炭商などに林野が集積され、製炭者の多くは自己所有林が狭小であり、原木を大山林地主の薪炭山に依存せざるを得ず、焼子制度<sup>21)</sup>のもとに製炭に従事する者が多かった。

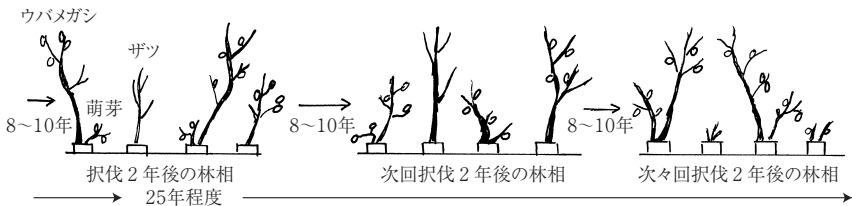
図10は南部川村市井川のH氏が入山している買山（立木のみ買得）における薪炭山の利用実態を示すものである。炭山の面積は約5町歩、木炭の産出量は約1,000俵（15kg）の山であり、炭窯や居小屋、サデ道は買山した製炭者によって、順次利用されていくという。1960年代までは、紀州備長炭の産地では、炭窯は山中のウバメガシの集材に便利な場所と、沢があり水に便利なところに構築された。沢に穿たれたえぶりつぼには、えぶりなどの木製用具などが水に浸され、白炭の消火に際しては素灰にその水が散水され、また非常時の防火用水にも使われた。居小屋は精錬（ねらし）の時などは、そこに起居すると共に、製炭作業中の休憩所ともなった。

図8 和歌山県N氏の択伐薪炭林の経営(1965年)



注) 篠原重則(1967年): 四国地方の製炭地域の類型, 地理学評論, 40-11 による。

図9 和歌山県秋津川の択伐林



注) 篠原重則(1967年): 四国地方の製炭地域の類型, 地理学評論, 40-11 による。

図10 南部川村市井川のH氏の買山（見取図）

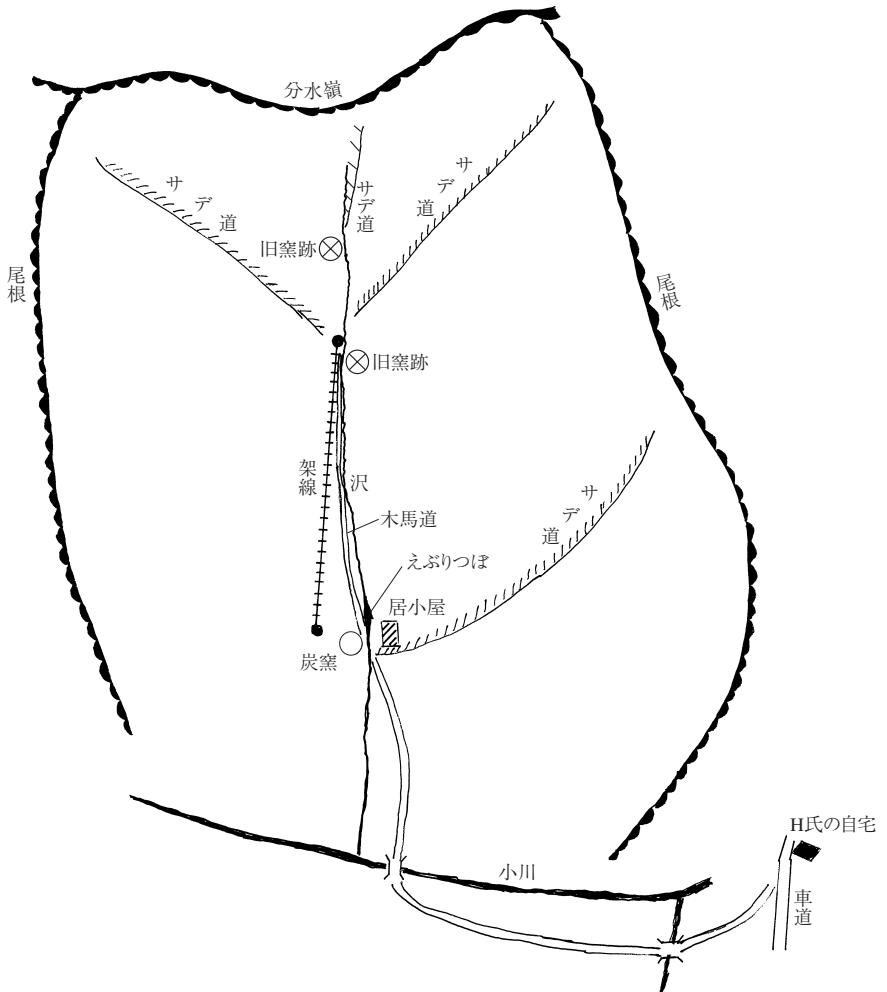




写真7 南部川村市井川における山中の炭窯(左)と居小屋(右端)(2004年3月)



写真8 南部川村市井川におけるえぶりつぼ(2004年3月)

### (工) 備長炭生産の現状

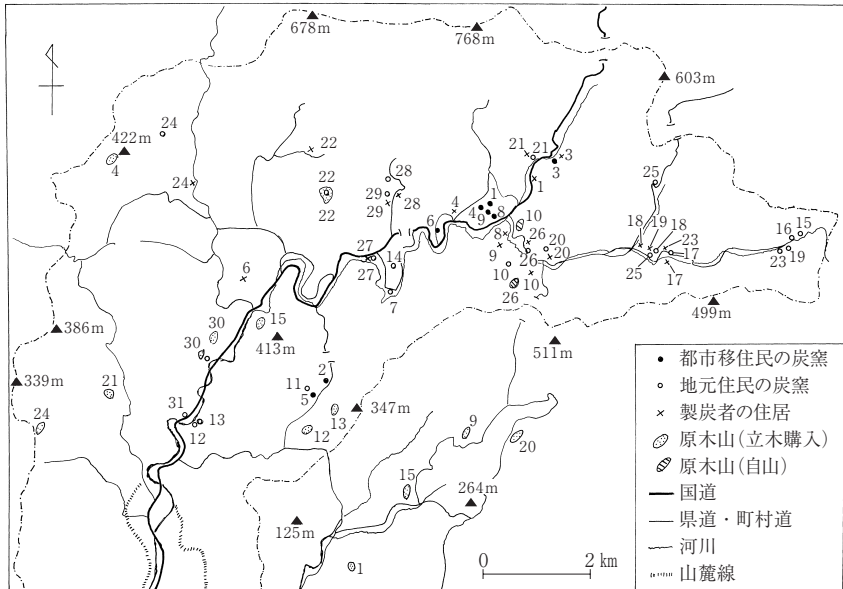
南部川村は2002年現在37名の製炭者が存在し、木炭生産量、製炭者数において、和歌山県下随一の市町村である。筆者は2003年から2004年にかけて、各炭窯に製炭者を訪ね、製炭者の製炭活動の実態と日常生活について実態調査を試みた。調査回数は延べ5回に及んだが、うち32名の製炭者から聞き取り調査をすることができた。図11は、その32名(地元製炭者24名、都市部からの新規参入者8名)の炭窯と住居、原木山を地図上に示したものである。この

うち原木山に炭窯を構築しているのは②②の製炭者のみであった。同氏の購入している薪炭山（原木のみ購入）の経営と自宅の関係は、図10に示しているところである。それ以外の炭窯は国道沿い、県道・町道・林道沿いにあり、それは軽四トラックで原木を搬入するのに便利な地点に立地しているといえる。製炭者が軽四トラックを導入しだしたのは1970年ころからであり、炭窯が道路沿いに主として立地しだしたのは、その後1980年ころからであるという。

炭窯と製炭者の住居は近隣しているものもあるが1kmから数km離れているものが多い。炭窯が人里離れた道路沿いに立地するのは、製炭作業中の木炭の煙を住民が嫌うことによる。

炭窯と原木山はおおむね離れている。それは製炭者の山林所有が皆無であっ

図11 南部川村の製炭者の炭窯・住居・原木採取林の分布（2003年）



注) 実地調査によって作成  
番号は製炭者番号を示す（同一製炭者については、炭窯・住居・原木採取林ともに同一番号を使用している）。

たり、極めて小規模所有であることによる。製炭者は原木山が移動するたびに、炭窯を再構築するとすれば資金と労力を多く要する。炭窯が原木山に規制されなくなったのは、軽四トラックが普及し、原木が容易に炭窯まで運搬できるようになったからである。

原木の入手方法は、購入した買山で、製炭者自身が伐採し、それを軽四トラックで窯元まで運搬するものもあるが、村内外の原木業者から購入するものもある。製炭能率を上げるためには、原木の伐採・搬出をするよりも、立木購入に依存する方が、木炭の販売生産量を伸ばせるという。

### (オ) 都市住民の紀州備長炭生産への新規参入者の実態

都市住民の紀州備長炭への新規参入者は、和歌山県定住促進課の資料によると、1984年から2004年の間に87名に達し、Uターン・Iターン併せて87名に達した。製炭業への新規参入者が多い和歌山県の市町村は、南部川村<sup>22)</sup>・中津村<sup>23)</sup>・田辺市<sup>24)</sup>・大塔村の和歌山県の中部山村地域であることは、既に指摘したところである。表5は製炭業への新規参入者の多い4市町村の新規参入者の前住地と移住年、移住動機などを一覧表としてまとめたものである。紀州備長炭に新規参入前の前住地は、大阪を中心とした近畿大都市圏、東京を中心とした首都圏に多く、次いで東海圏であるといえる。年齢層をみると、70歳を超える高齢者から、青壮年層まで多岐にわたっている。前住地の都市部での職業は多岐にわたるが、コンピュータ技師・銀行員・学習塾の



写真9 田辺市秋津川の紀州備長炭記念公園

(2003年11月)

手前は物産館一道の駅一、向こうは資料館

講師など、精神的ストレスの高い職業に従事していた者が目立ち、その他、近代工場で流れ作業の仕事に従事していたものが多い。

備長炭の製炭に魅せられた動機は、窯出し時の真赤に燃えさかる炎に魅せられた者が多いが、本質的には、自然に恵まれた山村の生活に憧れ、農林業で自活することに生き甲斐を目ざす者が圧倒的に多いといえる。このようにみると、かつては農山村から大都市域に就業を求める住民の移動が主流であったが、今や逆に大都市域から農山村への人口の還流が見られるのである。大都市の大企業に雇用されて厳しい管理社会に生きるのではなく、自然に恵まれた農山村で自活し、のんびりと暮らすことに生き甲斐を見出す都市住民が確実に増加していることを読みとることができる。

彼等は同伴者を伴って入村する者が多いのも一つの特色である。山村の在地の後継者が嫁不足に悩むのとは対照的である。大都市域からよき伴侶を伴って入村し、在地の独身の青壮年者を羨ましがらせている有様である。彼等の住居は都市での貯えによって自宅を建



写真10 田辺市秋津川における指導製炭士夫妻と研修生  
(2004年3月)

研修生 38歳，大阪市出身



写真11 南部川村清川における備長炭新規参入者夫妻  
(2003年3月)

右は夫(33歳)兵庫県揖保川町出身，左は新妻

表5 都市住民の紀州備長炭生産の新規参入動機と製炭形態

| 製炭者           | 年齢  | 前住地   | 同職業      | 移住年  | 移住動機          | 技術修得者          | 住宅    | 原木取得   | 生産量(俵) | 出荷先       |
|---------------|-----|-------|----------|------|---------------|----------------|-------|--------|--------|-----------|
| <b>南部川村</b>   |     |       |          |      |               |                |       |        |        |           |
| 1             | 50  | 大和高田市 | 学習塾      | 1993 | 肉体労働好む        | K <sub>1</sub> | 自宅    | 買山     | 874    | 森林組合      |
| 2             | 39  | 大阪市   | 燃料店      | 1993 | 転勤嫌う          | 炭問屋            | 借屋    | 原木買取   |        | 問屋        |
| 3             | 30  | 神奈川県  | 学生       | 1994 | 炭のテレビ見る       | H              | 自宅    | 買山     | 878    | 森林組合      |
| 4             | 55  | 藤枝市   | 家具店      | 1995 | リストラの恐れ       | H <sub>1</sub> | 自宅    | 買山     | 314    | 農協        |
| 5             | 45  | 大阪市   | コンピュータ技師 | 1998 | 体験炭焼き         | M              | アパート  | 原木買取   |        | 森林組合      |
| 6             | 53女 | 大阪市   | 保母       | 1999 | 都会に疲れた        | H <sub>1</sub> | 自宅    | 原木買取   |        | 農協        |
| 7             | 55  | 美山村   | 工場経営     | 1999 | 工場倒産          | H <sub>1</sub> | 自宅    | 買山     |        | 問屋        |
| 8             | 32  | 磐田市   | ヤマハ発動機   | 2000 | 山村への憧れ        | I              | 自宅    | 買山     | 726    | 森林組合      |
| 9             | 33  | 相生市   | 左官       | 2001 | 山村への憧れ        | K              | 村営住宅  | 買山     | 662    | 農協        |
| <b>中津村</b>    |     |       |          |      |               |                |       |        |        |           |
| 1             | 31  | 大阪市   | 菓子職人     | 1984 | 後継者           | 父              | 隣村自宅  | 原木買取   |        | 農協        |
| 2             | 66  | 和歌山市  | 工員       | 1987 | 帰郷            | 父              | 御坊市自宅 | 原木買取   |        | 問屋        |
| 3             | 72  | 大阪市   | 自由業      | 1994 | 田舎暮らしに憧れ      | 友人             | 空屋購入  | 原木買取   |        | 農協        |
| 4             | 46  | 名古屋市  | 工員       | 1995 | 田舎暮らしに憧れ      | Y              | 村営住宅  | 買山     |        | 農協        |
| 5             | 62  | 中津村   | 行商人      | 1998 | 雇用者でなく気楽      | 友人             | 自宅    | 買山     |        | 問屋        |
| 6             | 33  | 亀山市   | 工員       | 1999 | 雇用者でなく気楽      | Y              | 自宅    | 買山     |        | 農協        |
| 7             | 30  | 兵庫県   | サラリーマン   | 2003 | 山村生活に興味       | H <sub>2</sub> | 村営住宅  | 買山     |        | 問屋        |
| 8             | 56  | 堺市    | 郵便局員     | 2003 | 郵政民営化に反発      | 8              | 海南市自宅 | 原木買取   |        | 問屋        |
| 9             | 59  | 新宮市   | 郵便局員     | 2003 | 8の勧誘          |                | 居小屋   | 原木買取   |        | 問屋        |
| <b>田辺市秋津川</b> |     |       |          |      |               |                |       |        |        |           |
| 1             | 56  | 東京都   | コンピュータ技師 | 1998 | 備長炭サミットにて先人会う | K <sub>2</sub> | 市営住宅  | 買山     |        | 問屋        |
| 2             | 53  | 大阪市   | 印刷会社     | 2000 | 農林業への憧れ       | K <sub>2</sub> | 自宅建設  | 買山     |        | 農協、大阪の焼鳥屋 |
| 3             | 38  | 大阪市   | 自動車販売    | 2002 | 自活できる生活の魅力    | K <sub>2</sub> | 自宅    | 親方の手伝い |        | 問屋、農協     |
| 4             | 40  | 田辺市街地 | サラリーマン   | 2002 | 親の手伝い         | 父              | 自宅    | 原木買取   |        | 問屋        |
| <b>大塔村</b>    |     |       |          |      |               |                |       |        |        |           |
| 1             | 61  | 堺市    |          | 1963 | 都会生活に疲れる      | 父              | 自宅    | 原木買取   |        | 問屋        |
| 2             | 30  | 田辺市街地 | 水道店      | 1975 | 親の手伝い         | 父              | 自宅    | 原木買取   |        | 問屋        |
| 3             | 36  | 豊田市   | 工員       | 1990 | 親の手伝い         | 父              | 自宅    | 原木買取   |        | 問屋        |
| 4             | 43  | 東京都   | 電気工場     | 1992 | 田舎暮らしに憧れ      | H <sub>3</sub> | 県営住宅  | 買山     |        | 直売、農協     |
| 5             | 40  | 横浜市   | 銀行員      | 2001 | テレビで炭焼見る      | H <sub>3</sub> | 村営住宅  | 原木買取   |        | 農協        |
| 6             | 43  | 大阪市   | 運転手      | 2002 | 山村生活に憧れ       | H <sub>3</sub> | 村営住宅  | 原木買取   |        | 農協、問屋     |

注) 2003・2004年の実態調査による。

南部川村の K<sub>1</sub>、中津村の H<sub>2</sub>、田辺市秋津川の K<sub>2</sub>、大塔村の H<sub>3</sub> は和歌山県の認定する「紀州備長炭指導製炭士」である。

南部川村の製炭量は役場資料による。単位は15kg俵である。





写真12 南部川村市清川における備長炭新規参入者夫妻 (2004年3月)  
夫 32歳, 静岡県磐田市出身



写真14 中津村上田原における備長炭新規参入者夫妻  
夫 (72歳) は, 大阪市の元フリーライター

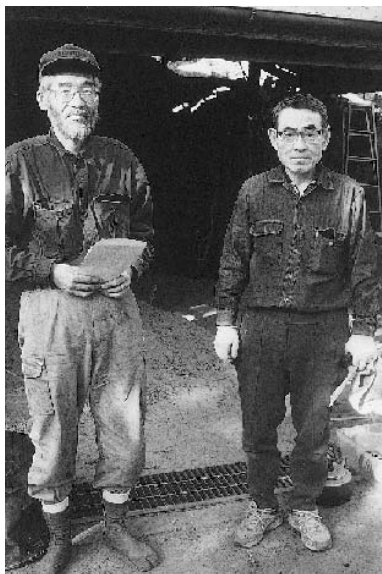


写真13 中津村上田原における備長炭新規参入者 (2003年3月)  
右 橋本さん (55歳)  
左 松本さん (59歳)  
共に郵政省につとめていた元国家公務員

設したもの、農山村の空き屋を改修したもの、地元自治体の用意している公営住宅に入居しているものなどがある。製炭作業も老若の別なく協力して従事している者が多い。また地元の集落の自治組織に何らかの形で加入している者が多い。彼等は道路の改修作業、草刈り、冠婚葬祭に参加する。ある中年婦人の話によると、農山村の人は純朴で、裏切られることがないので、信頼して組つきあいができるという。

製炭に際しての原木の入手は、自己所有林を持たないので、薪炭山の立木を購入するか、原木業者の軽四トラックで運んできたウバメガシを購入する。製炭業を始めた当初は薪炭山の見立てができないので懇意になった地元住民に仲介の労をとってもらい、薪炭山の原木量をこれは何窯分の炭山だと見立ててもらおう。

このように、今や都市から移住してきた紀州備長炭の新規参入者は、地元住民の後継者が枯渇するなかで、紀州備長炭の伝統的技術を継承する主力となっているのである。



写真15 田辺市秋津川における備長炭新規参入者の建設した住宅（2004年3月）  
自己資金1,000万円を投じて建設



写真16 大塔村小川における備長炭新規参入者の出荷作業（2004年4月）  
インターネットで、木炭の直売も行う。背後は備長炭の選別作業を行う妻

## VI 結 語

わが国の農山漁村は人口の減少と高齢化に悩まされ、衰退の一途をたどってきた。しかしながら、長らく繁栄を謳歌してきた大都市域においても自然環境の劣化が進み、治安の悪化が加わり、決して好ましい住環境の地域とは言い難

くなってきた。都市住民のなかには食の安全、豊かな自然環境に憧れ、農山漁村の直売所を訪ねたり、グリーンツーリズムに赴く傾向が次第に高まってきた。

和歌山県中部の山村は伝統的な備長炭の生産地として、つとに有名であった。その山村は現在、梅の生産・加工が盛んであり<sup>25)</sup>かつて備長炭の生産にたずさわってきたものも、高所得の得られる梅産業を指向し、伝統的備長炭の生産は後継者の不足から危機にさらされてきた。和歌山県は緑の雇用促進の一環として、衰退する備長炭の生産地域に都市住民の定住を促し、備長炭産地である南部川村、田辺市、中津村、大塔村等においては、県の施策に呼応するごとく、都市住民の山村定住を促し、都市域からの移住民に、伝統的備長炭の技術を伝授し、後継者不足を克服し、伝統的備長炭の生産を確保しようとしている。農山村の伝統的技術を移住してきた都市住民が継承し、伝統産業を守ろうとしている姿は、わが国の農山村においては、先駆的事例といえよう。和歌山県と各地方自治体の努力は高く評価されるが、都市住民を温かく迎え入れている和歌山県中部山村の住民の精神的風土がいかにして醸成されてきたかを解明するに至らなかった<sup>26)</sup>今後の課題として後日の研究に待ちたい。

#### 〔付記〕

本研究は2004年7月の中四国都市学会（愛媛大会）のシンポジウム「都市・農村交流—対等のパートナーをめざして—」において、研究発表したものに加筆修正したものである。資料収集に当たっては、和歌山県農林水産部定住促進課に貴重な資料の提供を受け、田辺市役所・南部川村役場・中津村役場・大塔村役場からは各種製炭関係の資料の提供を受けた。また現地調査に際しては、田辺市秋津川の大沢晃氏・木村稔氏、南部川村の勝股文夫氏、大塔村の廣田喜八氏には、それぞれ懇切なる御教示をいただいた。また各市町村の現地の製炭者各位にも快く取材に応じていただき感謝に耐えない。以上各官庁の方々、現地で御教示いただいた方々に対して、深甚の謝意を表する次第である。

## 注および参考文献

- 1) 農林水産省 (2005) : 平成 16 年度食料・農業・農村白書
- 2) 篠原重則先生退官記念誌刊伝会 (2001) : 「教育と研究の軌跡」, pp. 33~36.
- 3) 篠原重則 (1965) : 愛媛県津島町の製炭形態, 人文地理, 17-3, pp. 42~60.
- 4) 篠原重則 (1967) : 四国地方の製炭地域の類型, 地理学評論, 40-11, pp. 17~40.
- 5) 篠原重則 (1999) : 農産物の直売と山村活性化—愛媛県日吉村の事例—, 香川大学教育学部研究報告 I, 107 号, pp. 1~23.
- 6) 篠原重則 (2002) : 愛媛県中山町における農産物の直売と山村活性化の課題, 愛媛の地理, 16 号, pp. 22~30.
- 7) 篠原重則 (2004) : ユズ加工品の直売と山村の活性化—高知県馬路村の事例—, 愛媛の地理, 17 号, pp. 34~49.
- 8) 篠原重則 (2004) : 水産物の直売と漁村の活性化—愛媛県三崎町の事例—, 松山大学論集, 16 巻 1 号, pp. 201~291.
- 9) 篠原重則 (2004) : 梅の生産・加工・販売システムの確立と山村の活性化—和歌山県南部川村の事例—, 松山大学創立 80 周年記念論文集, pp. 339~368.
- 10) 須山聡 (1993) : 職人の地域的移動パターンからみた輪島漆器の生産地域の拡大, 地理学評論, 66A-10, pp. 597~618.
- 11) 宮川泰夫 (1994) : 村上木彫堆朱産地の存続機構, 愛知教育大学研究報告, 43 (社会科学編), pp. 39~55.
- 12) 定住希望者に定住センター内外で短期の研修を行っている。研修日程をみると, ①日帰りの日程, ②2泊3日の日程, ③4泊5日の日程, ④有機農業体験日程があり, このうち2泊3日の日程をみると, 第1日目には和歌山県の山間地の生活(講義), 和歌山県の山間地の現状説明, 地域農林家又はIターン関係者との懇談会, 農林業情報・定住支援情報に係る情報検索方法, 第2日目には, 圃場での実習(栽培管理及び収穫出荷), 第3日目には, 林業・農業現地視察研修がなされている。
- 13) ふるさと定住センター内で栽培している作物を中心に関係機関と協力して経営・技術等の支援を行っている。
- 14) 岸本定吉 (1999) : 紀州備長炭「熊野会議」讃辞, 田辺市経済部農林課編「紀州備長炭の世界」, pp. 1~4。
- 15) 紀州備長炭は原木を立てた状態で焼くので, その炭窯は備長立てくべ窯という。これに対して高知県安芸地方では, 1912年(大正元)備長炭の技術が伝播してきたが, より大量に備長炭を焼くために, 1930年原木を横に寝かせて焼く, 備長横くべ窯が考案され, 現在はほとんど備長横くべ窯であり, 製炭能力は15kg俵にして, 1回に100俵程度の木炭が焼ける炭窯が多い。
- 16) 紀州備長炭の製法については, 「紀州備長炭の世界」(1999年田辺市農林水産部)と現地の製炭者からの聞き取り調査によった。

- 17) 和歌山県では、伝統的産業である紀州備長炭の発展と、製炭技術を後継者に継承して行くことを目的として、経験豊富な紀州備長炭製炭者を「紀州備長炭指導製炭士」として認定する制度を1992年度（平成4）より発足している。紀州備長炭指導製炭士の役割は、各地域で開催される製炭技術研修会、品質格付け、現場指導等の講師として、後継者の育成活動に努めることである。1999年現在、和歌山県下には10名の紀州備長炭指導者が認定されており、県内外の備長炭を生産する新規参入者の技術指導を行っている。その所在地は中津村(1)・南部町(1)・南部川村(3)・田辺市(1)・大塔村(1)・日置川町(1)・那智勝浦町(2)である。
- 18) 南部川村は全国一の梅産地であり、梅栽培にたずさわる農家の農産物販売規模も、500～1,000万程度のものである。
- 19) 篠原重則（1967）：四国地方の製炭地域の類型，地理学評論，40-11。
- 20) 福本和夫（1955）：新旧山林大地主の実態，によると，1,000町歩以上の巨大山林地主の一番多い県は和歌山県の10人である。
- 21) 1960年の世界農林業センサス市町別統計書（林業地域調査－和歌山県）には，南部川村では自営製炭世帯数111のうち，焼子が主の世帯数は48にも達している。
- 22) 南部川村には，紀州備長炭振興館が平成3年4月に開館した。展示情報室では，各種木炭の展示がなされ，炭に関する資料・道具も展示されている。また近くの丘陵地には，備長炭製炭窯が2基（村営）あり，備長炭生産の新規参入者に貸与されている。また近くには，森林組合の設営した備長炭の炭窯が2基あり，同じく備長炭を生産する新規参入者に貸与されている。
- 23) 中津村には，中津村製炭研修所があり，備長炭の炭窯が2基あり，ここで紀州備長炭指導製炭士が備長炭を生産する新規参入者の技術指導をしている。
- 24) 田辺市秋津川地区（備長炭の発祥地といわれている）には，紀州備長炭記念公園が平成9年7月にオープンした。公園内には木炭資料館の紀州備長炭発見館があり，木炭に関する知識や歴史・文化が学習できるようになっており，ほかにバーベキュー館や，物産店（道の駅）もある。また付属施設として，炭窯5基があり，紀州備長炭指導製炭士が，備長炭を生産する新規参入者に技術指導をしている。炭窯棟に並んでは，伝習館があり，新規参入者の宿舎の機能も果たしている。
- 25) 篠原重則（2004）：梅の生産・加工・販売システムの確立と山村の活性化－和歌山県南部川村の事例－，松山大学創立80周年記念論文集，pp.339～368
- 26) 和歌山県の中部山村に都市住民が多く移住しているのは，近畿圏・首都圏・中京圏から容易に接近できる地の利があるといえよう。同じ備長炭の生産地域でも，海で隔たる高知県室戸市には備長炭を焼く県外移住者は皆無である。大都市圏からの地理的近接性は和歌山県が有利であるといえる。